

Healthcare Interpreting: Discourse and Interaction

編集者 Franz Pöchhacker and Miriam Shlesinger

出版社 John Benjamins Publishing Company

出版年 2007年8月

頁数 155

ISBN 978-90-272-2239-8 (ハードカバー)

評者 渡部 富栄



本書は、*Interpreting* 誌 2005 年度特集号 (7:2) を *Benjamins Current Topics (BCT)* の第 9 冊目として出版したもので、世界初の医療通訳に関する研究論集である。

1990 年以降の世界の通訳研究において、コミュニティ通訳が実践と学術研究の視点から注目されるようになる。特に、医療通訳はその専門性と特殊な要件から、研究の対象として取り上げられることが急増した。日本の医療通訳の状況は、海外から比べるとまだ著についたばかりで、雇用もボランティアがほとんどで、知識と技術の獲得と認知の普及に向けてワークショップや会議の開催など懸命な努力が行われている。技術水準の向上のためだけでなく、体系的教育と制度の整備のためのエビデンスの必要性からも、専門性の追求と並行して通訳研究を今から積極的に進めていくことが日本にも求められる。医療通訳は医学系の会議通訳のミニチュア版ではない。文化も含め社会と密接につながる独自の要素を持つ専門性の高い分野であることから、社会学的な通訳研究として、例えば通訳者の役割、態度や行動が社会との相互作用の中で深く分析されることになる。政策提言も視野に入れた研究も出てくるだろう。通訳の大学院教育が進み、実践に基づく研究を志向する人が増えることで、研究への関心が急激に高まり興味深いユニークな展開が期待できる分野だ。本書の 5 論文全てが実証研究であるため、世界の研究動向を把握したい人だけでなく実務者にも一読を勧めたい。

5 つの論文は、2004 年 5 月にストックホルムで行われた第 4 回 *Critical Link Conference* で発表された中から、通訳者が介在する対話のディスコース分析と医療の場での (異文化間) コミュニケーションをいう 2 つの視点から切り込んだものである。

最初の論文 *Roles of community interpreters in pediatrics as seen by interpreters, physicians and researchers* (Yvan Leanza 著) は、医療通訳の役割に関する総論ともいえるものだ。 *Lancet* 誌など医学系論文は、医療通訳者の役割を「翻訳者 (translator)」としてしかとらえていない。真に患者と医療者の橋渡し役として認識される必要がある。この論文は、理論だけでなく、観察と面接データ、ディスコーステキストのトライアングレーションにより量的および質的結果を示している。対象はスイス仏語圏の小児科クリニックだが、最終的には包括的視点からコミュニティ通訳者の新たな役割分類を提案し、通訳者と医療提供者に教育提言を行っている。

医師と患者の診察場面で、dyadic (2者間: 医師と患者) と triadic (3者間: 医師と患者とアドホック通訳者、または訓練された通訳者) のディスコース分析をしたのが2番目の論文 *Doctor-patient consultations in dyadic and triadic exchanges* (Carmen Valero Garcés 著) だ。スペインとアメリカの医療施設で録音されたスペイン語、アラビア語、英語が介在する対話が分析されている。通訳者のいない2者間の対話とアドホック通訳者のいる3者間の対話には共通点があった。質的記述的研究ではあるが、比較定量分析も含まれている。不十分な医学知識による誤訳から、医療施設に通訳者のセミナーの開催を提案している。

1人称代名詞を使うか3人称代名詞を使うかが、プロ通訳者かアドホック通訳者かを区別する指標だと言われているが、それを調べたものが3つ目の論文 *Exploring untrained interpreters' use of direct versus indirect speech* (Friedel Dubsloff & Bodil Martinsen 著) だ。対象はアドホック通訳者である。同じシナリオで同じ医師と患者がほぼ同条件で面接を4回ロールプレイし、毎回、異なる通訳者が加わり(計4人)、通訳者と参加者の人称代名詞の変化が調べられた。通訳者は、途中で自分の立場への視点が変わり、代名詞の人称が変わり一貫した呼びかけ方をしていない。それに呼応して、医師の使う代名詞の人称も途中で代わってしまうことがある。筆者は、この人称代名詞の変化について、誤解が生じた際、「誰が言ったかを明確にするために、状況により必要だ」と述べている。

4番目も同様の論文であるが、プロ通訳者を使っているところが先の論文と異なる。 *Dialogue interpreting as a specific case of reported speech* (Hanneke Bot 著) では、心理療法士と患者、プロ通訳者から成る3グループが行った心理療法が各2セッションずつ録画され、分析された。プロの通訳者3人全員に、通訳の冒頭に報告動詞の追加 (he says など) と人称代名詞の変化 (I から he あるいは she) が確認されたが、使用の頻度と理由には通訳者ごとに差があった。報告動詞の使

用と人称代名詞の変化は会議通訳には見られない。そのため学会で拒否する意見が出てきたが、筆者はそれを「“translation machine model”に基づく考え方だ」と反論している。報告動詞を使うことで通訳者自身が距離を置くことができる。ただ頻繁に使用すると効果は薄れる。

最後の論文は、医療通訳者の行動 (behavior) に対する新たな枠組みを提案している。Examining the “voice of interpreting” in speech pathology (Raffaella Merlini and Roberta Favaron 著) では、オーストラリアの2つの医療施設で録音された、プロ通訳者が入った言語療法のセッションが詳しく分析された (イタリア語を話す一世移民、英語を話す医療職者、NAATI 資格を持つ施設内通訳者)。筆者は、社会心理学者 Mishler E.G. の提唱した “voice of medicine” と “voice of lifeworld” (生物学的モデルを超えた社会と影響しあうものとして医学を説明するために使ったもの) に基づき、“voice of interpreting” という通訳者の行動を考察する枠組みを提案した。

評者：渡部 富栄 (WATANABE Tomie) 大東文化大学大学院／青山学院大学非常勤講師、会議通訳者 (医薬、保健、看護などが主領域)。訳著：(2007年)『看護のコミュニケーション第5版』エルゼビア・ジャパン (Julia Balzer Riley, *Communication in Nursing*, Fifth Edition, 2004) 連絡先：tomie_w@jcom.home.ne.jp
